

変化するライフステージ を楽しむ



さとうクリニック（佐野医院非常勤） | 小澤佳代

仕事編

1 Q 診療放射線技師を目指したきっかけ

A 子供のころやや病弱だった私は、病院に行く機会がよくありました。病院の待合でいつも目にする「関係者以外立ち入り禁止」の扉の表示。そしてその扉の奥に颯爽と消えていく医療従事者。それらの光景がとてもカッコよく「あの扉の奥にはどんな世界が広がっているのだろう」と憧れました。

小さい頃の将来の夢は「お医者さん」でしたが、成長とともにこれは現実的には厳しいなと悟り医師は諦めることにしました。そこで浮上してきたのが診療放射線技師でした。その理由は単純すぎてお恥ずかしいのですが、私はずっと女子校だったので「女の世界はもう充分、診療放射線技師なら男性もいて大丈夫だろう」というものです。また、検査の際に患者さんと関われるイメージもあり惹かれました。そうした理由で就いた職種ではありますが、子供のころ抱いた医療への憧れが今も診療放射線技師を続ける支えになっています。

2 Q やりがいを感じるとき

A 20代、都内の大学病院に勤務していた頃は、多くの検査を確実に手際よくやれたときや難しい検査をやり終えたときにやりがいを感じました。寝る間もない忙しい当直業務さえ「疲れた～」と愚痴りながらも充足感を感じ

じ働いていました。

その後結婚、引越を経て、静岡県の市立病院、そしてその後クリニックでの勤務へと、職場の規模は小さくなっていました。これらの職場では超多忙な大学病院のときとは違ったやりがいを感じます。確実に良い検査をこなす楽しさももちろんありますし、それ以外に患者さんの想い、人柄などの背景まで知ることが出来ます。そしてかかりつけの患者さんの場合、その後どのような生活を送られているかがわかるため、自分の検査が役立っていることを直に感じられます。また「とても緊張していたけれど、スタッフ方が優しかったので安心しました」と言われることが増えました。これは本当に嬉しいです。

3 Q 私の職場遍歴

A 初めて就職した職場は都内の大学病院です。診療放射線技師が60名程、うち女性技師は10名でした。先輩後輩の上下関係がしっかりしていて、まさに体育会系。毎日のように反省会という飲み会でした。仕事の業務量は膨大で、勤務後は院内カンファレンスや学会のための勉強、週末は技師会業務のお手伝いなど本当に大変でしたが、この時期に鍛えられたことが今も役立っています。つらさも楽しさもあった職場でした。

その後結婚に伴い静岡県に引っ越し、富士山のふもとの市立病院で働くことになりました。技師15名程の職場です。ここでの職場は長らく男性技師だけだったようで、私は久々の女性技師として歓迎されました。マンモグラフィやエコーの検査を担当することが多く3年ほど勤務しましたが、長男出産を機に退職しました。私は疲れ果てるまで働く癖があり、育児と仕事の両立は無理だと思ったからです。しかし、家事育児の世界にも1年ほどで飽きてしまいました。そんな頃市立病院勤務時代にお世話になった先生が「脳神経外科クリニックを開業するので働いてみませんか」とお声をかけてくださいり、就職し、今年で勤続15年目です。この間、次男出産、育休、その後はパート勤務